

そうか有名なのか

あの子がいつもいる可能性の大きい、
後ろの車両の方へ、歩き続けた。

中書島について、宇治線に乗り換える為、
第四プラットホームへ足を運んでいるとき、
他の学校の男子生徒が喋っているのが聞こえた。

「ええ子やなあ。」
「ほんまに、ええ子や。」

「どこの子や。」
「住んでるのは、八幡や。」

「何年や。」
「今、中学三年。」

「なんで知ってるのや。」
「有名やもん。」

僕は、黙って知らん顔して聞いていた。
「そうか、有名なのか。」と思った。

家に帰って、すぐ、宇治川の土手へ行く。
そばの川の水門が開いて、暗い宇治川に、
勢いよく水が注ぎ込むのが白く見えた。

めしを食べ、すぐ寝た。

「そうか、あの子は有名なんだ。」
と、僕は寝ながら、天井に指であの子の顔を絵を書いた。

